

〈音楽〉

表現する力を育てる創作指導の工夫 —イメージを持って音楽を作る「作曲ガイド」の活用を通して—

沖縄県立普天間高等学校教諭 知念美樹

I テーマ設定の理由

中央教育審議会答申(平成20年1月)は、学習指導要領の改訂に向けて、現行の学習指導要領の「生きる力」の理念を引き継ぎ、学力の要素として「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」「主体的に学習に取り組む態度の育成」などを重視する内容を提言している。その中で、これまでの音楽科の課題として、「感性を高め、思考・判断し、表現する一連のプロセスを働かせる力の育成」「歌唱の活動に偏る傾向の改善」「創作と鑑賞学習の充実」などが挙げられ、改善が求められることになった。

この提言を踏まえ、平成21年告示の高等学校学習指導要領(以下、学習指導要領と略す)芸術科音楽の指導事項では、思考・判断し表現する過程を大切にして能力を育成するということを重視し、より具体的な文章で内容が明確化され、指導の充実が図られている。中でも、指導内容のすべての分野・領域にわたって「音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して」という事項が追加されたことなどが改訂の特徴として挙げられる。

音楽科の学習内容は、「A表現」「B鑑賞」の2領域があり、「A表現」には、「歌唱」「器楽」「創作」の3分野が設定されている。このうちの「創作」は、「音楽を作る」活動であり、生徒が音楽を作る側に立ち、音楽の要素や構成を理解して再構築するプロセスを経験することで、既存の曲に織り込まれている作曲者の思いや意図を感じ取り、音楽の聴き方や表現の変容が期待できる学習だと捉えられている。これまでの授業実践では、年間を通して合唱やギターを中心とした器楽学習などに積極的に取り組み、生徒も音楽活動に意欲的に参加しているが、読譜や記譜に苦手意識を持つ生徒が多いことや、学校の実情に適した教材開発の不十分などの理由から、創作学習に積極的に取り組むことができずにいた。創作学習の充実を図るには、生徒が楽しみながら、気軽に作曲に取り組める教材の開発や指導の工夫などを考える必要があった。

そこで、本研究では、創作学習の充実を図るため、音楽の諸要素やしくみなどの学習と関連させ、コード進行を手掛かりにした作曲の手引き「作曲ガイド」を用い、オリジナル曲を作るための指導の工夫を考えていく。「作曲ガイド」での学習を通して、音楽の諸要素やその働きを理解し、イメージを持って音楽を作ることで、自ら考え、工夫して表現する力が育つのではないかと、また、日々の生活の中で耳にする音楽や既存の楽曲が持つ雰囲気、曲想、美しさなどを感受する力が培われるのではないかと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

創作活動において、「作曲ガイド」を活用し、イメージを持って音楽を作ることによって、音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して、自ら考え、工夫して表現する力を育てることができるだろう。

II 研究内容

1 「表現する力」について

(1) 「表現する力」とは

『A表現』は、人間の内部に生まれた心情やイメージが音響として表出される状態であり、人間から音楽をアウトプットすることである。『B鑑賞』は、人間の外部で鳴り響く音楽を、聴覚を通して内部に受容する状態であり、音楽を人間へインプットすることである。」と、寺田孝雄(2009)はこの二つの領域について述べている。「音楽を表現する」ということは、まず「表現したいもの」「表現したいイメージ」があり、それを喉や手や身体全体、また楽器という道具を使って外に表わすことだといわれ、創作においても、「『表現したいイメージを持つ』ことは、音楽を作る上でも大切なことのひとつとされ、自己の作品で『何を表現したいのか』という創作の意図を持つことが大事である。」と和田崇(2009)は述べている。このように、音楽を新しく作るには、「こういうイメージを表現したい」という思いや意図を持ち、音楽的な感受をもとに、イメージと照らし合わせな

から表現をいろいろと工夫できる能力が重要だとされている。このことから、本研究における「表現する力」とは、「創作活動において、音楽を形づくっている諸要素を知覚し、表現したいイメージを明確にして、音を音楽に構成し表すことのできる力」と捉える。

(2) 「表現する力」の評価について

学習指導要領に基づいた音楽科の評価の観点は、「音楽への関心、意欲、態度」「音楽表現の技能」「音楽表現の創意工夫」「鑑賞の能力」の4点である。この4観点は、基礎的・基本的な知識・技能の習得とこれらを活用する思考力・判断力・表現力等を相互に関連させながら伸ばしていくとともに、主体的に学習に取り組む態度の育成を図るという学力の三要素を踏まえて設定されている。これからの音楽の学習指導とその評価のイメージ図を右に示す(図1)。

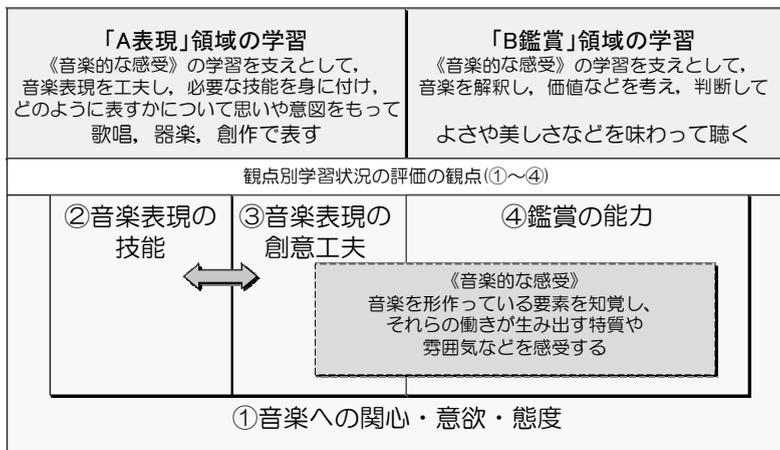


図1 これからの音楽の学習指導とその評価(イメージ図)

今回の改訂で、「音楽的な感受」は、「音楽表現の創意工夫」と「鑑賞の能力」に共通して位置づけられ、「A表現」と「B鑑賞」それぞれの学習を支えるとともに、両領域の関連を図る上で重要だとされた。また、図の矢印で示されているように、「A表現」の学習においては、「音楽表現の創意工夫」に係る力と「音楽表現の技能」に係る力を相互にかかわらせながら伸ばしていくこととされている。これらのことから、本研究における「表現する力」の評価は、「音楽表現の創意工夫」と「音楽表現の技能」に視点をおき、生徒にどのような力を身に付けさせたいのか明確にして評価する必要がある、

2 創作指導について

(1) 創作指導の意義

阪井恵(2009)は、創作指導は、実際に音を音楽に構成する活動は、既存の音楽を成り立たせている表現媒体や構成要素をつくる側から再認識する活動にもなるので、作る経験を通じた認識が音楽の聴き方を変え、それにより、歌唱・器楽・鑑賞の分野と有機的に関連付けることが可能になる活動であり、「活動を通じた創造的な経験そのもの」に意義があるとし、「音を音楽へ構成したりする試行の場を保障すること自体が重要である。」と述べている。また、木村充子(2009)は、「旋律を作る活動において、生徒は自身が内的に抱く旋律のイメージを実際に声や楽器によって表出し、それを客観的に聴き、自身のイメージしたものを照らし合わせて思考・判断し、さらにより良いものにするために試行錯誤の過程をたどる」としている。そして、この一連の活動のプロセスの中には、「音楽的なイメージを持つこと」「音・音楽を表出すること(演奏すること)」「聴くこと」「思考・判断すること」という極めて重要な音楽的経験が含まれると述べている。

(2) 創作の指導事項について

創作の特徴は、実際に音を組み合わせさせて音楽をつくりだすことにある。創作の流れと指導事項(キーワード)を図に示した(図2)。今回の改訂で、指導事項「エ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感じて音楽を作ること」は、すべての音楽活動を支える基盤として位置づけられている。創作の指導においても、本事項と関連付けて、ア～ウの事項を指導することが重要である。また、これらの事項すべてに「イメージをもって」という言葉が示され

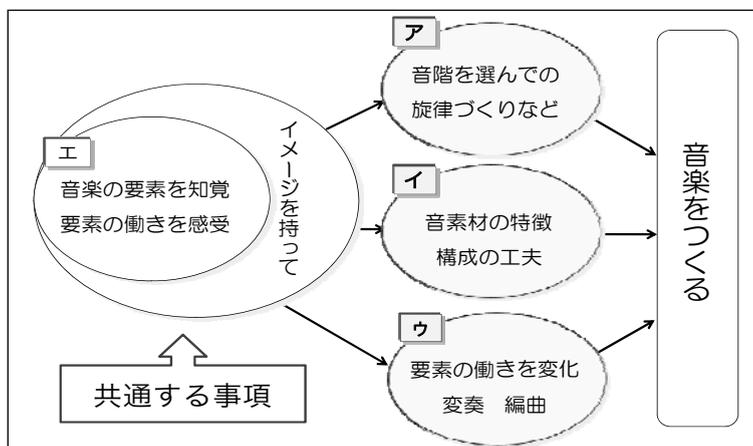


図2 創作の指導事項(キーワード)

ているため、「エ」と共に共通する事項として整理した。

3 「作曲ガイド」を活用した創作について

(1) 「作曲ガイド」の内容について

「作曲ガイド」は、生徒の「音楽的な知識の習得・活用」を支援するためのオリジナルの補助教材である(図3)。音楽の諸要素を6つに絞り、生徒がリズムを考える際の参考資料としてのリズムシートや、グループで作曲プランを練るためのプランシート、演習用のワークシートなども盛り込み、見通しを持って、段階的に学習に取り組めるような構成にする。課題ごとに音源も用意し、楽譜を見ながら実際の音や旋律を聴くことによって、学習効果が上がるよう工夫する。

作曲にはさまざまな方法があるが、本研究では、コード進行を手掛かりにした作曲に取り組む。コード進行を基にした作曲は、ポピュラーミュージックなどの作曲方法としては一般的な手法とされ、様々なアプローチの展開が可能とされている。例えば、コードの構成音を基に、旋律や副次的な旋律を作ることや、コードを変えることで響きを変えたり、曲想を変化させたりすることが比較的容易にできる作曲方法である。初期の段階の指導では、「使える楽器」「使える音階」「全体の長さ」など、いくつかの条件を設定することによって、活動の展開がスムーズになるとされている。授業では、始めに既習曲を分析し、使用されている構成音やリズムの特徴、諸要素の働きとそれによって感受されるイメージなどの学習に取り組む。いくつかの旋律作りのパターンを学習した後、イメージを明確にし、オリジナルの作曲に取り組む。

(2) イメージを具体化するための工夫

① イメージを言葉にする学習

楽曲を聴いて、「楽しい、弾んだ感じ」や「悲しい気分」などと感じるのは、音楽の諸要素の働きなどがもたらす効果だということに気が付き、感受したイメージを言葉で表す。受容した音楽について言葉で表すことで、音楽によって喚起された自己のイメージや感情を一層意識することとなる。また、その過程において音楽に対する感性が豊かに働くと言われている。鑑賞で取り上げる楽曲の文化的・歴史的背景の解釈などは、ここでは重視せず、音楽の諸要素に焦点を絞り、その特徴を聴きとらせる。また、楽曲の旋律のリズム打ちなどをしてリズムパターンや速度が生み出す効果を知覚させ、そこから感じられる印象を言葉で表す。ワークシートの設問などを工夫して、感受した内容やイメージの明確化を図る。

② 表現したいイメージを音にする工夫

「楽しい、弾んだ感じ」「悲しい気分」というイメージや気分を表現するために、音楽の諸要素の「どの部分を」「どのように」工夫すれば、表現したいイメージを表すことができるか気付かせる。例えば、曲の終わりや、曲が一段落する感じを与える「終止形」の形や、跳躍音程を使うことで、大きな決意や感情の幅、空間的な広大さを表現することができることなどを知る。グループ活動では、プランシートを用いて作る曲のイメージをまとめ、リズムや使う音を選び、旋律を作っていく。

(3) 創作の具体的なプロセス

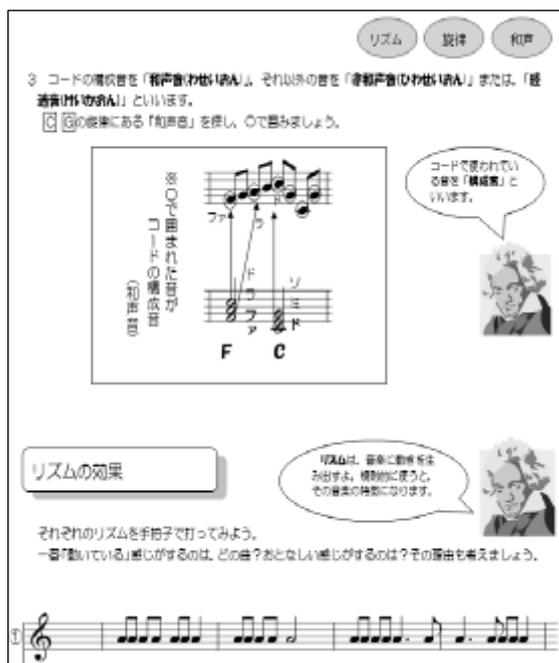


図3 作曲ガイド(抜粋)

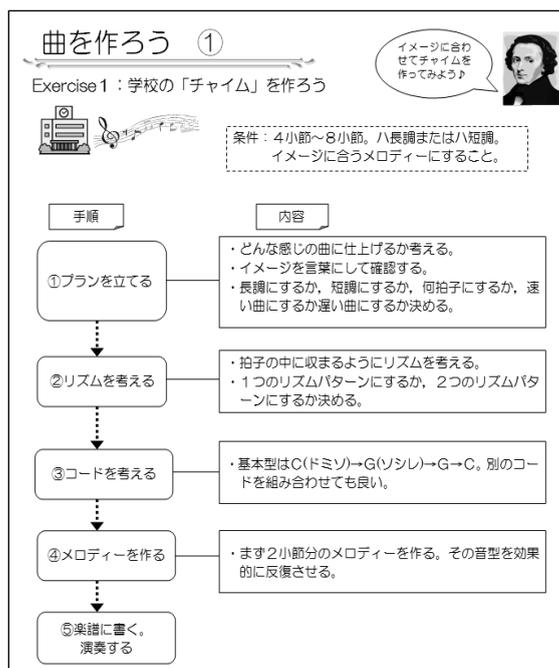


図4 プランシート(抜粋)

本研究では、イメージを持って音楽を作る活動のプロセスを4つのステップに分け、段階ごとに学習を進めていく（表1）。

表1 創作の具体的なプロセス

視点	ステップ	学習活動	学習内容
音楽の諸要素の知覚	1	楽曲の分析による諸要素の知覚	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同じコード進行を持つ既習曲を題材に、音楽の諸要素（リズム、旋律、和声、拍子、速度、形式）を知覚する。 ・ 同じコード進行を持っていても、リズムや使う音の組み合わせ方によって、異なる印象を与える別の旋律が作られるということに気づかせ、諸要素の働きについて知覚する。 ・ 諸要素の働きによって生み出される効果を学習し、諸要素の形を工夫することで、曲のイメージを伝えることができることを理解する。 <p>演習1</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「曲の終わる感じ」を作り、コード進行の響きをもたらす「緊張」「弛緩」の効果や楽曲の「終止」の形について理解する。
	2	諸要素の聴き取り	<ul style="list-style-type: none"> ・ 鑑賞活動を通して、音楽の諸要素の特徴や動きの変化などを聴き取る。 ・ 諸要素の特徴を聴き取り、内面で感じる漠然としたイメージを自分なりの言葉で表現する。
音を音楽に構成する力	3	作曲方法の理解	<p>演習2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2つのリズムパターンから4小節の旋律「学校のチャイム」を作り、基本的な旋律の作り方を知る。 ・ テーマについて話し合い、そのイメージを言葉で表す。 ・ イメージが伝わるリズムや旋律の使い方を知る。
	4	イメージを伝える旋律作り	<p>演習3</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 好きなコード進行を選び、8小節のオリジナルの旋律を作る。テーマを決め、作るイメージを明確にし、イメージを表現するためのリズムや音の組み合わせなど、音楽の諸要素を工夫して作曲する。 ・ 曲のイメージや工夫した点について説明し、楽譜や演奏で表す。 ・ お互いの演奏を聴き、その特徴を感じ取る。

検証前に実施した生徒のアンケートにおいて、小・中学校で「音楽作りや作曲などの創作活動の経験があるか」という質問では、「経験がある」と答えたのは32%で、68%の生徒が未経験という結果であった。「作曲をしてみたいか」の質問には、「してみたい」と前向きな回答をした生徒は72%と、半数以上の生徒が関心を持っているが、反対に「したくない」という消極的な回答も28%で、創作に対して何らかの抵抗や不安があることが推測される。「作曲する時、困るだろうなと思うこと」という複数回答の質問では、「作り方がわからない」「作ったメロディーを楽譜に書けない」「メロディーが思い浮かばない」などに回答が集まった。アンケート結果から、作曲への関心はあるものの、音楽を作る上で必要な基本的な知識や経験が少ないため、不安を感じている生徒は多いと考える。以上のことを踏まえ、生徒の作曲への不安を和らげ、楽しみながら旋律作りができるような学習の進め方を考えた。

Ⅲ 指導の実際

創作活動に対する生徒の不安を少なくし、楽しみながら作曲に取り組ませるために、グループ学習の形態をとってゲーム的な要素も織り交ぜながら学習を進めていく。生徒個々の音楽の基礎的・基本的な力の差があっても、グループのメンバーと話し合ったり、教え合ったりすることで学習意欲が高まり、全員が何らかの形で作曲活動に参加できるよう工夫した。作る曲のイメージが明確で、そのイメージに基づいた旋律になっているか、また、作った作品を楽譜や演奏で表すことができたかななどを、ワークシートや演奏聴取などから評価する。

1 題材名 「イメージを伝える旋律を作ろう」

2 題材の目標

(1) 表現したいイメージに相応しい音の動きやリズムの組み合わせを探りながら、全体のまとまりを工夫し、作曲することができる。

(2) 楽曲を聴いて、音楽を形づくっている諸要素や構成、それらの働きによって生み出される曲想などを知覚・感受し、それぞれの特徴を感じとることができる。

3 創作の評価規準

ア. 音楽への関心・意欲・態度	イ. 音楽表現の創意工夫	ウ. 音楽表現の技能	エ. 鑑賞の能力
表現したいイメージに相応しい音の動きやリズムの組み合わせなどを探りながら、オリジナルの曲を創作することに意欲的である。	コードの構成音を基盤にした旋律、リズム、楽節のまとまりを考え、イメージに相応しい旋律を工夫している。	リズム、旋律、コード進行による和声の響きや特徴、形式を理解し、イメージを表現するための創作の技能を身に付けている。	音楽を形づくっている要素や構造と曲想のかかわりを感じ取って、楽曲の特徴を聴き取ることができる。

4 指導計画 (全8時間)

次	ねらい	時	主な学習内容と活動	・教材 ☆学習要素	【評価】 具体的評価規準 【観点】
1 【音楽の諸要素の知覚】	・音楽を形成している諸要素や構成など、基本的な知識について学習する。 ・作曲者が意図していることを考察し、理解を深める。	1	・既習曲を鑑賞し、簡単な旋律の作り方を知る。 ・いろいろな音楽を鑑賞し、音楽の諸要素やその働きによる効果の特徴をまとめる。	・既習曲の楽譜 ・作曲ガイド ☆旋律、リズム、和声(コード)	[鑑賞] 音楽の諸要素やその働き、音楽がもたらす効果について理解することができる。 【ア, イ, エ】
	・音や音楽を構成する様々な要素が人にもたらす効果に気付く。 ステップ1 ステップ2	1	・コード進行の(緊張と弛緩)を知り、曲の「終わる感じ」を作る。演習1 ・Beethoven交響曲第6番「田園」の一部を鑑賞し、それぞれの印象をまとめ、その根拠を考える。	・作曲ガイド ・鑑賞教材 ・ワークシート ☆旋律、リズム、和声、長調・短調	[創作] 音楽の終わる感じ(終止)を理解し、旋律を作ることができる。 [鑑賞] 音楽の諸要素やその働き、音楽がもたらす効果を自分なりに感じとることができる。 【ア, イ, ウ】
2 【音を音楽に構成する活動】	・旋律の動き、リズムの効果について学ぶ。 ・コードの構成音から旋律の作り方を学ぶ。 ・リズムパターンから旋律を作る方法を学ぶ。 ステップ3	2	・音楽の諸要素について学習する。 ・グループを編成し、様々な場面に合わせた「チャイム」を創作する。演習2 ・作品を発表する。	・作曲ガイド ・キーボード ・ワークシート ☆旋律、リズム、和声、拍子、形式、速度 ・ワークシート ☆音楽の構成など	[創作] ・自分のイメージしたリズム、旋律を作り、楽譜にすることができる。 ・お互いの作品を聴きあい、特徴をまとめることができる。 【ア, イ, ウ】
	・いろいろなパターンのコード進行を聴き、和声の響きやそこから受ける印象の違いを知る。 ・イメージを言葉にして表わすことができる。	1	・既存曲の鑑賞をする。 ・鑑賞した曲で使用されているコード進行から、好きなタイプを選ぶ。 ・グループでテーマを決め、作る曲のイメージについて話し合う。	・作曲ガイド ・キーボード ・ワークシート ☆旋律、リズム、和声、形式、速度	[鑑賞] ・いろいろなコード進行やその響きの効果を自分なりに感じとることができる。 ・コード進行の響きを聴いて感じたイメージを言葉に表すことができる。 [創作] ・作る曲のイメージをまとめることができる。 【ア, ウ, エ】
3 【音を音楽に構成する活動】	・グループで練り合いをし、イメージを持って作品制作ができる。 ・自分のイメージに近づけるための工夫ができる。 ステップ4	2(本時)	・旋律やリズムを工夫し、イメージに近づけるための工夫をする。 ・作った旋律を楽譜に書いたり、楽器で演奏したりする。演習3	・作曲ガイド ・キーボード ・ワークシート	[創作] ・コード進行を基に、イメージしたリズム、旋律を作り、楽譜にすることができる。 ・音楽の要素について理解し、イメージに近づけるための工夫ができる。 【ア, イ, ウ】
	・それぞれの作品の特徴を感じ取り、言葉で表す。	1	・作品を発表し、工夫した点について述べる。 ・他のグループの作品を鑑賞し、特徴を聴き取って感想を述べ合う。		[鑑賞] お互いの作品を聴き合い、特徴を聴き取って感想を述べることができる。 【ア, ウ, エ】

5 本時の指導 (第3次: 6, 7時間)

(1) 本時の目標

- ①グループで話し合い、作る曲のイメージを明確にする。
- ②イメージに合ったリズムを考え、コードの構成音を基に旋律を作る。

(2) 準備

作曲ガイド、ワークシート、キーボード(各グループ3台)、PC、プレゼンテーション用機器

(3) 本時の展開

学習活動		指導上の留意点	評価方法【評価の観点】
導入	1. 前回の学習の確認をする。 2. 本時の目標を確認する。	◇作曲のプロセスや留意事項などを確認する。 ◇「イメージを伝える旋律を作ろう」の目標と本時の流れについて説明する。	
展開	1. 作曲プランを練る。 ①コード進行の響きから感じたイメージについて話し合い、作る曲のタイトルを決める。 ②作る曲のイメージに合うリズムや響きなどについて話し合う。 2. 曲を作る。 ①コード進行の響きや一部形式の形を確認する。 ②リズムを決める（2小節）。 ③音を入れていく。 ④演奏する。 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> ※グループ内係分担 ・キャプテン ・キーボーディスト ・リズムメーカー ・メロディーメーカー </div>	◇プランシート、ワークシートを用いてイメージを明確にしていく。 ◇キャプテンがリードしてグループの意見をまとめさせる。 ◇ゲーム感覚で楽しく取組ませ、短時間でまとめさせる。 ◇生徒個々の活動を支援する。 ◇生徒個々の活動を支援する。 ①キーボード担当にコードを弾かせ、音の響きを伝えさせる。 ②リズム担当は、リズムパターンを参考にリズムを決める。 ◇リズムが決まったら、コードに合わせてリズム打ちをさせ、旋律のイメージを掴む支援をする。 ③メロディー担当は、コードの構成音を基に旋律を作っていく。 ◇各グループを観察し、つまづいている箇所をサポートする。 ④キーボード担当は、作った旋律をコード伴奏で弾く。 ◇イメージに近いものができているか中間発表で確認する。 ◇それぞれのグループの工夫した点を発表する。	行動観察 プランシート記入 ワークシート記入 【ア, エ】 行動観察 ワークシート記入 演奏聴取 行動観察 演奏聴取 【ア, イ, ウ】
まとめ	1. 本時の学習を振り返る。 2. 次回の予告, 片付け。	◇本時の学習の成果と課題について確認し、次回の活動を予告する。	

6 仮説の検証

研究の仮説に基づく検証授業において、音楽を形づくっている要素を知覚し、表現したいイメージを明確にして、音を音楽に構成することのできる力・表現する力が育ったかについて検証を行う。「作曲ガイド」での学習やグループでの演習、アンケート調査等によって生徒の変容を見る。2年生音楽選択クラス30名を対象とした。

(1) 音楽を形づくっている諸要素の知覚

「作曲ガイド」を用い、音楽を形づくっている諸要素についての学習を行った。同じコード進行を持つ3曲を題材に楽曲分析を行い、同じ響き（コード進行）を持っていても、リズムや使う音の違いで異なる印象を与える別の旋律ができるということの気づきに繋がった。

次に、教材として教科書にも掲載されているBeethovenの交響曲第6番「田園」の第一楽章を用い、諸要素に注目して楽曲を聴く鑑賞活動を行った。この曲はBeethovenの代表曲のひとつで、旋律、速度、強弱などに特徴があり、聴きとることが比較的易しい曲である。鑑賞のワークシート（図5）をみると、リズムと速度を混同していたり、使う言葉が適当でなかったりするなどの課題もみられたが、90%の生徒が「要素」を意識して聴き取り、その特徴を言葉で表すことができた。ある生徒は、

ベートーベン
交響曲第6番 <田園>
第1楽章

調性：ハ長調
明るく、平明で軽やか、牧歌的な雰囲気を持つ

※()は表現例です。自分なりの言葉で表現してみよう。

○響き(明るい、暗い、穏やか、激しい、重い、軽い)
明るくて大きく広がる響き

○リズム(穏やか、激しい、よく動く、単調)
はさむようなリズム

○速度(速い、遅い、ゆったり、歩くような、疾走)
楽しくスキップする様な

○メロディー(なめらか、音の上下行が激しい)
穏やかなメロディー

○強弱(静か、力強い、弱々しい、騒々しい)
だんだんたたくましくなる

1. この曲から、どんな場面や感情をイメージしますか?
家から背負っていきと丘があり、そこから本道を歩き登っていくと、目の前には広がる景色。(径行)

2. あなたの日常に合わせて、タイトルを変えて下さい
ある日曜日

図5 鑑賞のワークシート

題材とした曲のイメージを「自転車で風を受けながら、坂道を全力疾走していく感じ」と表し、「田園」という標題から受けるイメージにとらわれず、生徒の日常の行動や経験などから生まれるイメージを引き出し、言葉と結びつけることができていた。

検証後のアンケートで、「楽曲を鑑賞する時に、音楽の諸要素の特徴を聴き取ることができたか」という質問には、70%の生徒が「できた」「まあまあできた」と答え、多くの生徒が諸要素を意識して楽曲を鑑賞し、その特徴を聴き取ることができたのではないかと考える(図6)。また、「他の作品を聴いた時に、その音楽の諸要素の特徴などから、作者の意図や思いを感じ取ることができると思うか」という質問でも、67%の生徒が「よくわかると思う」「大体わかると思う」と回答している。

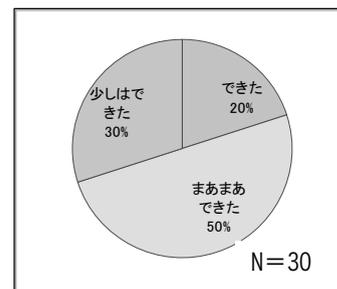


図6 諸要素の聴きとり

「音楽の諸要素の知覚」では、「リズム」「和声」「形式」の項目において、それぞれ90%、77%、93%の生徒が要素について知覚することができている(図7)。「拍子」や「速度」の回答が低いのは、今回の創作で扱った拍子が3、4拍子のみだったことや、速度標語などの活用まで学習が至らなかったためと考える。「難しいと思った要素は何か」という質問では、87%の生徒が「旋律」と答えている。これは、コードの構成音を基に旋律を作る時の、和声音(構成音)・非和声音(経過音)の扱い方や音の繋ぎ方、イメージを表すリズムや構成などが難しかったためと考える。十分な理解を図ることが難しい要素もあったが、「作曲ガイド」での学習や演習、諸要素に視点をおいた鑑賞などを通して、音楽を形づくっている諸要素の知覚が図られたのではないかと考える。

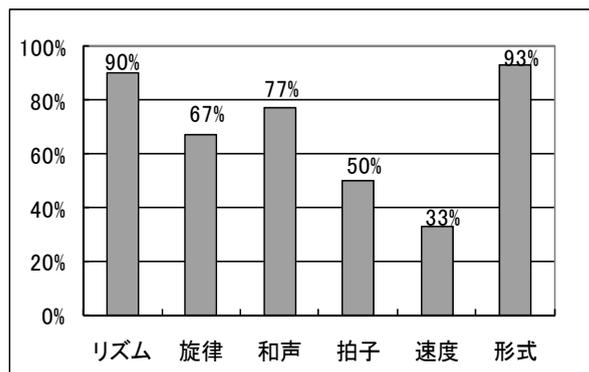


図7 音楽の諸要素の知覚

(2) 音を音楽に構成する力の検証

検証授業第2次からグループでの作曲に取り組み、2つの演習を行った。グループのメンバーを、「意見をまとめ、作る音楽のイメージを明確にする」役のキャプテン、「イメージに合ったリズムパターンを考える」役のリズムメーカー、「コードの構成音を基に旋律を考える」役のメロディーメーカー、「作った作品を演奏する」役のキーボーディストという係に分け、全員が作曲に関わり、楽譜や演奏で表すことができるよう支援した(写真1、2)。



写真1 演習の様子



写真2 演習の様子(リズムの確認)

① 演習1：旋律の「終わる感じ」を作ろう(第1次)

2小節分の旋律で、最後は必ず主音にして「曲の終わる感じを作る」という演習1を行った。

「作曲ガイド」で学習したリズム、旋律、和声の働きや、主音を用いることで「旋律が終わる感じ」になるということを、実際に旋律を作ることで知覚・感受させる演習である。生徒Aは、コードの構成音を使い、リズムや音を自然な感じで繋げ、最後を主音の「ド」で終わらせるなど、ガイドで学習した要素について理解している

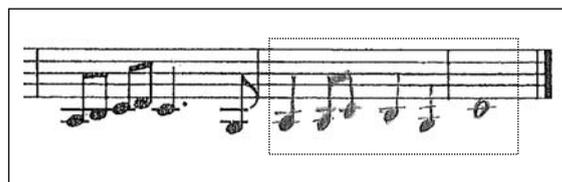


図8 演習1「旋律の終わる感じ」

(図8)。リズムや使う音の違いはあるものの、クラスの74%の生徒が、要素の働きを認識して、旋律の終止の形を作ることができた。しかし、構成音を並べただけであったり、リズムが曖昧だったりする生徒が26%おり、旋律のイメージを思い浮かべられなかったり、音符に具体化できないことなどが課題と捉えられた。このような課題を解決するためには、歌唱・器楽指導において、音名唱やリズム打ちを多く取り入れたり、和音の響きを聴き取らせたりするなど、生徒個々の音

感を育てる学習を充実させるとともに、作りたい旋律のイメージを描くための指導の工夫が重要だと考える。

② 演習2：「学校のチャイムを作ろう」(第2次)

曲のタイトルとイメージを喚起できるような説明を最初に与え、そのイメージに合わせたチャイムの旋律を作る演習を行った。グループAに、タイトル「A.M. 8 : 50」「早起きして気分も爽快、宿題もバッチリできた。」という場面を提示し、生徒に作る曲のイメージを考えさせた。「楽しい感じ」「明るい響き」「速度は速め」「リズムは弾む感じ」というプランを立て、作ったリズムパターンが図9である。「作曲ガイド」での学習を踏まえ、2つのリズムパターンを作り(①)、それを反復している(②)。シンコペーションを使って弾む感じを出し、三連符で変化を付け、最後の四分音符で落ち着く感じにしているなど、曲のイメージに近づける工夫をしている。このリズムパターンに旋律をつけて完成した作品が図10である。コードの構成音を理解し、イメージの「弾む感じ」を上手く表現している。また、最後に主音を使って終わる感じを作る(④)など、事前に学習した作曲方法が理解できていると捉えることができる。但し、2小節目では、構成音より「ラ」の音が多く、強い印象を与えてしまう。そのためコードの響きにうまく溶け込めず、やや特異な響きとなっている(③)。間違いではないが、コードと旋律が和声的に合わないこのようなケースは、他のグループの作品にも見られ、和声の響きに溶け込む美しい旋律を作るには、その音の響きが調和しているかどうか聴き取る力・和声感を育てる学習を重ねる必要があると考える。

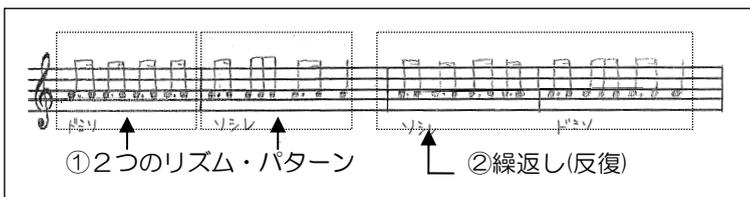


図9 リズムパターン

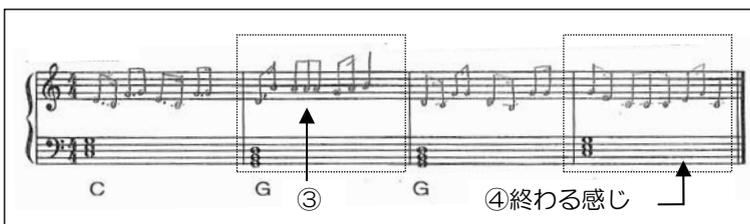


図10 グループA：学校のチャイム「A.M. 8 : 50」

③ 演習3：「イメージを伝える旋律を作ろう」(第3次)

好きなコード進行を選び、演習1と同じ方法で、「8小節」「一部形式」の旋律作りを取組んだ。リズムパターンを決めた後、メトロノームを使って速度の設定をした。その際、曲のイメージを話し合う段階で挙げられた「ゆったりとした感じ」を作るために、まずメトロノームで速度を「J=72」に設定したグループが、その速度がアンダンテ Andante という速度標語の範囲に含まれ、アンダンテが「ゆっくりと歩くような速さで」という意味で、それまで関心を持てなかった速度標語と自分達のイメージが一致したことに驚き、速度標語もイメージを伝えるための大事な要素だということへの気づきに繋がった。小さな変化だが、このような気づきも「作る経験を通した認識」ではないかと考える。

使用するコードも増え、「素敵な旋律にしたい」「面白い曲を作りたい」という生徒の意欲が高まったこともあり、コードの構成音から旋律を考える作業には予想以上に時間がかかった。図11は、グループBの「達成感」という作品である。16分音符を連続して使用することで、「明るい・元気」なイメージに近づける工夫がみられ、リズムが与える印象・効果などの理解ができていないと捉えることができる。⑦と⑨に同じ旋律を使用し、⑧と⑩でリズムや旋律を変化させ、「音楽が終わる感じ」を作るなど、一部形式の特徴も理解しており、自然な動きで旋律を上手にまとめることができている。

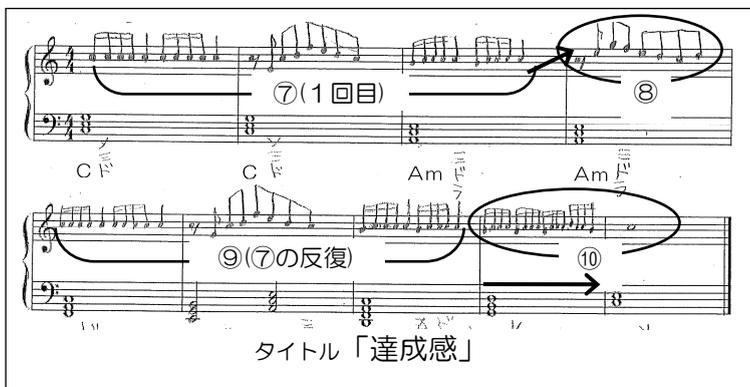


図11 グループB：「イメージを伝える旋律」

⑦と⑨に同じ旋律を使用し、⑧と⑩でリズムや旋律を変化させ、「音楽が終わる感じ」を作るなど、一部形式の特徴も理解しており、自然な動きで旋律を上手にまとめることができている。

グループCは、図12のように作曲プランを立て、「プライベート・ビーチ」というタイトルの曲を作った(図13)。このグループは、「ゆったり」した雰囲気を出すためにリズムをシンプルにしているが、曲が単調にならないようリズムパターンの組み合わせを2種類考え、旋律に動きを出すための工夫をするなど、試行錯誤しながら作曲に取り組んだ。⑫は上行形、⑭は下行形にして落ち着いた感じで旋律を終わらせていることから、生徒が曲の形式やその効果について、理解していることが推測できる。

検証後のアンケートで、「旋律を作る時に難しかったこと」という質問では、「作り方がわからない」「作ったメロディーを楽譜に書けない」と答えた生徒の数が、事前に比べて減少している(図14)。

これは、リズムパターンやコード進行を基にした作曲方法の理解や、イメージしたリズムや音を具体化する学習を重ねることで、音や楽譜に表すことができるようになったためと考える。「メロディーが思い浮かばない」「イメージがわからない」では数が増加しているが、これは、今回の創作で採用した作曲方法において、コード進行やリズムパターンから先に決めるなどいくつかの条件を設定したことや、グループ活動としたことで、生徒が人間関係などに不自由さを感じていたためではないかと考える。生徒感想にも、「自由に音を選ぶことができなかった」「自分のイメージを伝えることが難しかった」などの記載がみられた。制約の多い作曲方法に難しさを感じてはいるものの、「イメージに近い曲を作ることができた」という質問では、76%の生徒が「できた」と感じている(図15)。

このように、曲を作る工程やグループの作品から、生徒は、ガイドで学習した内容を理解し、イメージに近づける工夫をしながら、音を音楽に構成することができたのではないかと捉える。「『作曲ガイド』は、作曲する時に参考になったか」という質問には、97%の生徒が「参考になった」と回答している(図16)。生徒は、作曲する時に必要な知識をガイドで習得し、諸要素の働きを工夫することでイメージに近づけることを、ガイドの活用を通して理解することができたのではないかと捉える。

(3) アンケートに見る生徒の意識の変容

今回の経験を通して、創作の授業に対しては、86%の生徒が「楽しかった」と回答している(図

時間	気分は?	リズムは?	響きは?	速度は?
夕方	最高	ゆったり	優しく 包み込む よかな感じ	ゆくり ♩=88

図12 グループC：イメージを掴むためのプランシート

図13 グループC：「イメージを伝える旋律」

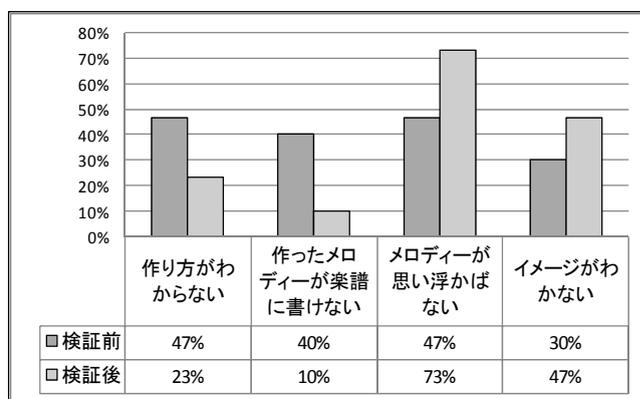


図14 作曲する時に難しかったこと

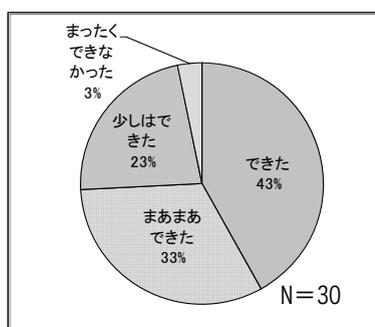


図15 イメージに近い曲作り

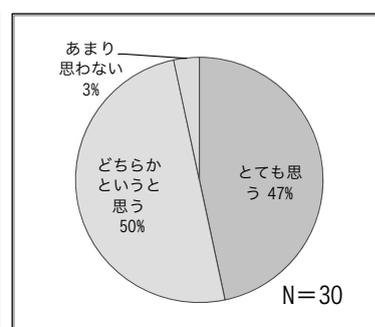


図16 ガイドは参考になったか

17)。「自分には無理だと思っていた作曲ができて嬉しい」「みんなで作りあげていくのが楽しかった」「知らなかった形式やコードの構成音など難しかったけど、曲ができた時は楽しかった」「難しかったけど、完成した時の達成感が凄かった」という感想も多く、今回の検証において、曲の作り方がわかり、音楽を作る楽しさや創造することの楽しさを伝えることができたのではないかと考える。生徒の感想の一部を記載する(表2)。アンケート結果から、グループで作曲する方法を採用したため、「メンバーと意見が合わない」「1人で作りたい」という生徒数名が、「思うようにできなかった」と感じていることも判明した。グループ学習を発展させ、個人での作曲にも取り組めるような学習計画も考えていきたい。

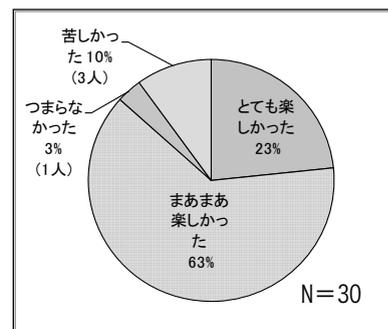


図17 授業の感想

表2 創作の授業を終えての生徒の感想(抜粋)

- ・十人十色の考え方、感じ方があって参考になった。
- ・少し作曲に興味があったので、授業が始まる前から楽しみだった。いい曲が作れたと思うし、これからもいっぱい作ってみたい。
- ・知らなかった形式やコードの構成音など難しかったけど、曲ができたときは楽しかった。
- ・絶対できないとか難しそうなおイメージばかりあったけど、実際やってみると、リズムから一つ一つグループみんなで考えていって、意外に楽しかったし、とても勉強になりました。
- ・難しかったけど、完成したときの達成感がすごかった、自分たちでも作曲ができたので良かった。
- ・曲を作るのは思っていたよりも難しい。作曲する人をとても尊敬します。

生徒の作品分析やアンケート結果等による意識の変容など、一連の検証結果から、「作曲ガイド」を活用し、イメージを持って音楽を作ることによって、音楽を形づくっている諸要素を知覚し、それらの働きを感受して、自ら考え、工夫して表現する力を高めることができたのではないかと考える。生徒が自分達で作ることを楽しみ、悩みながらも音楽を作り上げ、満足感・達成感を感じてくれたことも大きな成果だと考える。

IV 成果と課題

1 成果

- (1) リズムパターンやコード進行を手がかりにした簡単な作曲方法を知り、表現したいイメージをリズムや音を工夫して具体化する力、楽譜に表わす力など、表現する力を高めることができた。
- (2) 「作曲ガイド」を使った学習を通して、音楽を形づくっている6つの諸要素(リズム、旋律、和声、拍子、速度、形式)を知覚し、それらのはたらきによって楽曲の特徴が生みだされることを理解することができた。
- (3) 作る音楽のイメージに合わせて6つの諸要素を工夫し作曲することで、それらの働きがもたらす効果についての認識を深めることができた。

2 今後の課題

- (1) 歌唱・器楽指導での音名唱やリズム打ちを多く取り入れたり、和音の響きを聴きとらせたりするなど、リズム感や和声感を育てるための指導法及び内容を研究する必要がある。
- (2) 「作曲ガイド」では、音楽の諸要素を6つに絞り、簡単な旋律を短時間で作曲させる方法で創作に取り組んだが、生徒の理解や関心・意欲を高めるため、内容や題材の工夫をさらに研究する必要がある。
- (3) 創作の技能を高めるためには、歌唱・器楽の分野や鑑賞領域においても、「音楽を形づくっている諸要素」に視点をおいた学習活動を展開する必要がある。すべての音楽活動において、学習内容を関連させ、生徒の発達段階に合わせた系統性のある学習計画を考えていきたい。

〈主な参考文献〉

- 中等科音楽教育研究会 2010 『中等科音楽教育法』 音楽之友社
 木下牧子 2008 『図解雑学よくわかる楽典』 ナツメ社
 藤原豊・植田彰 2010 『8小節から始める曲作りの方法50』 リットーミュージック